

# BBLセミナー プレゼンテーション資料

2021年6月2日


【グローバル・インテリジェンス・シリーズ】

習近平政権と科学技術

— 「中国の夢」が作り変える国際秩序 —

九州大学大学院比較社会文化研究院准教授

益尾 知佐子



---

# 習近平政権と科学技術： 「中国の夢」が作り変える 国際秩序

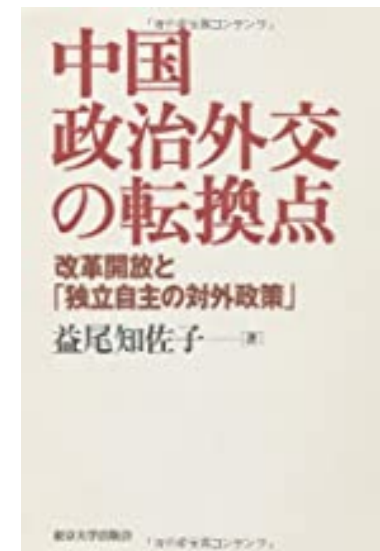
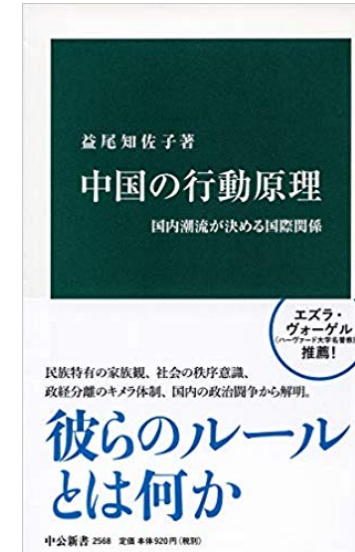
九州大学比較社会文化研究院

准教授 益尾知佐子

MASUO@SCS.KYUSHU-U.AC.JP

# 益尾知佐子 自己紹介

- 東京大学教養学部卒業、同総合文化研究科で博士号
- 日本国際問題研究所、E. F. ヴォーゲル研究助手などを経て
- 2008年から九州大学大学院 比較社会文化研究院 准教授
- 専門: 中国外交、国際関係論
- 2014-15年、ハーバード大学イエンチン研究所で研究学者
- 2019年には中国で計6ヶ月間、訪問学者(中国社会科学院、外交学院)
- 博士論文のテーマは、中国の隠された外交転換(革命外交の放棄)。執筆中に中国共産党の党史研究の手法を学ぶ。現在も党や政府組織の文書の読解を好む。
- 長年、中国内外で中国外交に関する聞き取り調査も続けている。



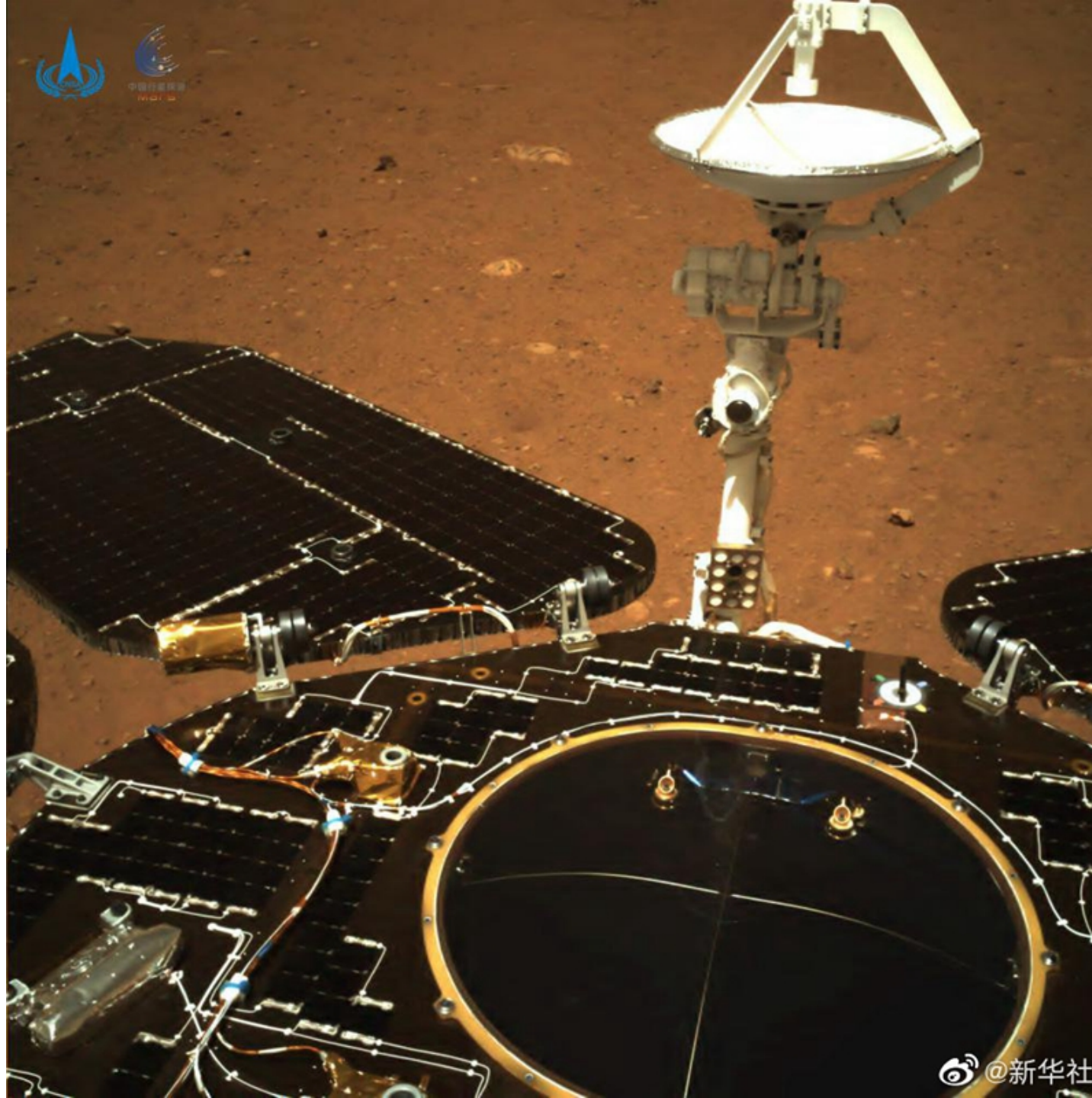
# 中国科学技術の 到達度合い



2021年5月15日  
中国はカプセルの火星着陸と探査機投入に成功  
(米国に継ぐ2番目)

- ①周回機・天問1号の火星軌道への投入
- ②カプセルの投下と着陸(恐怖の9分間)
- ③探査機投入

という3段階を一気に達成、  
**常識はずれの快挙**



中国の火星探査機・祝融号が初めて地球に送ってきた画像  
(通信は天問1号経由)

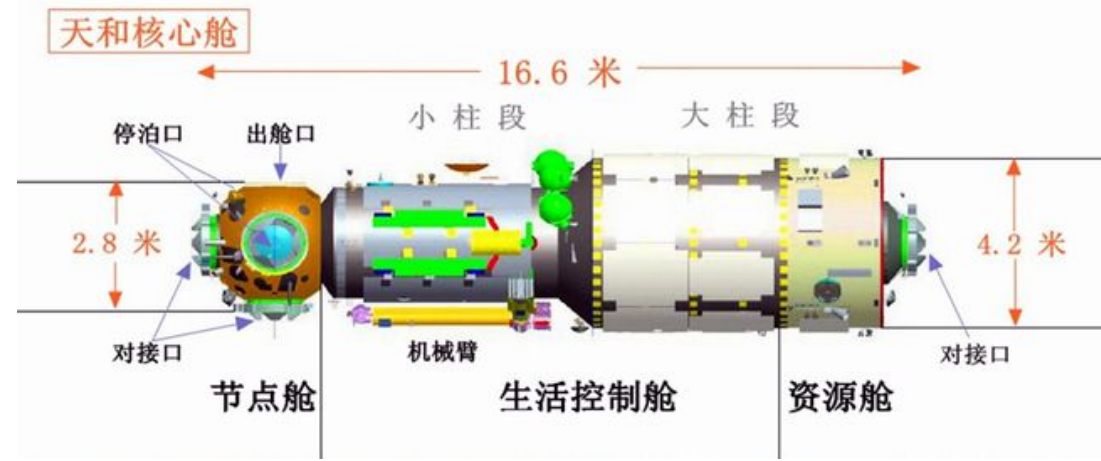
新華社 2021年5月19日  
[http://www.xinhuanet.com/2021-05/19/c\\_1127466283.htm](http://www.xinhuanet.com/2021-05/19/c_1127466283.htm)

# 中国、近年の宇宙開発

- 2016年9月、世界初の量子暗号衛星「墨子」の打ち上げ
- 19年1月、「嫦娥4号」が世界で初めて月の裏側に着陸
- 20年12月、「嫦娥5号」の回収機が月の土を地球に持ち帰る(サンプル・リターン、米国に続き44年ぶり)
- 21年3月、燃料の余った「嫦娥5号」本体が地球と太陽の重力が釣り合うラグランジュ点に到達、「残業」で地球観測を継続
- 4月、中国は独自宇宙ステーション(空間站)「天宮」の核心モジュール「天和」を軌道投入(打上げ用ロケット「長征5号B」の残骸落下問題)、「天宮」は22年に運用開始予定

\* 米露日などが運用している国際宇宙ステーション(ISS)は老朽化で24年に引退予定、

(しかもロシアは完全撤退表明)、それ以降は「天宮」のみが唯一現役に



「天和」核心モジュール  
『搜狐』2021年4月29日  
[https://www.sohu.com/a/463628221\\_100069650](https://www.sohu.com/a/463628221_100069650)

→ 中国は分野によっては自主開発ですでに世界最先端の技術を獲得

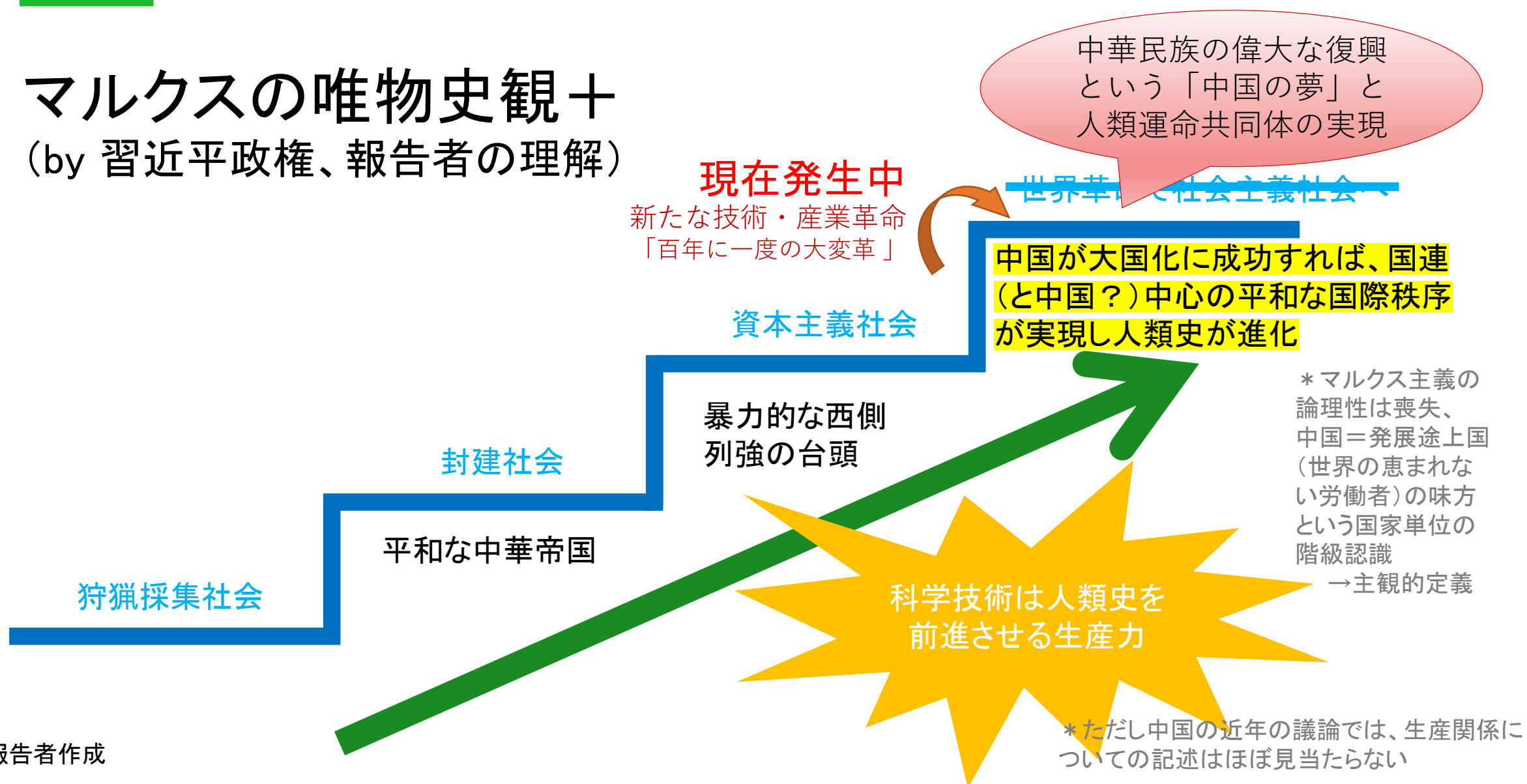
資料ははしよりますが、まとめると…

# なぜ中国は科学技術開発に邁進するのか？

- 1) 科学技術は、それそのもののみならず、それに付された歴史的・政治的な意味づけが重要
- 2) 鄧小平「科学技術は第一の生産力だ」: 1975年に毛沢東と鄧小平の間で論点に、鄧小平は妥協せず  
に失脚するが復活して改革開放を指揮 → 発展のための科学技術  
(鄧は復活後、海外科学者への聞き取りと大学入試の正規化に最初に着手)
- 3) 他方、中国はその歴史認識から「中国の台頭」にもともと強い関心(2003年には「平和的台頭」提唱)、  
西側国際関係論の覇権移行論の影響
- 4) 2006年 CCTVのドキュメンタリー『大国崛起』(*The Rise of the Great Nations*) で2と3が合流  
科学技術が人類の「時代」を形成し、先端科学技術を攻略した者が大国として台頭する、という認識が  
社会全体で共有される(今日も共産党の教育教材として活用、マルクス主義の影響)
- 5) 15年3月 中共中央・国務院「体制メカニズム改革を深めイノベーション主導型発展戦略の実施を加速  
するための若干の意見」 → 以降、習近平政権下で国内体制の整備が加速(実行力！)  
第13次五カ年計画に向けた作業、そこから軍民融合・「中国製造2025」などが派生

# マルクスの唯物史観十

(by 習近平政権、報告者の理解)



\* 報告者作成

中華民族の偉大な復興  
という「中国の夢」と  
人類運命共同体の実現

現在発生中  
新たな技術・産業革命  
「百年に一度の大変革」

~~世界革命で社会主義社会へ~~

中国が大国化に成功すれば、国連  
(と中国?)中心の平和な国際秩序  
が実現し人類史が進化

資本主義社会

暴力的な西側  
列強の台頭

封建社会

平和な中華帝国

狩猟採集社会

科学技術は人類史を  
前進させる生産力

\* マルクス主義の  
論理性は喪失、  
中国=発展途上国  
(世界の恵まれない労働者)の味方  
という国家単位の  
階級認識  
→主観的定義

\* ただし中国の近年の議論では、生産関係に  
についての記述はほぼ見当たらない

歴史の正しい側に立とう！



# 「中国の夢」をかけた科学技術開発

実現できるかどうかで、中国と人類の命運が分かれる

(イメージ: 愛国主義と国際主義を合体させた人類全体のための闘争)

- 習近平は「古参党员」的。信条も作風も。
- 彼は主観的にはおそらく、世界の指導者としての「正義感」で戦っている(個人的な野心もあるが)。

攻略すべきは次世代人類の社会基盤を形成するような先導的分野: 「AI、量子情報、集成電子回路、生命健康、脳科学、生物育種、空天科技、深地深海など」 = No.1でなければ意味がない

- 手法: 中国共産党の指導という政治体制の「優位性」を發揮した課題克服

→「新型挙国体制」の整備(党による市場統制強化、軍民融合)

→「国家実験室」の中で重点分野のイノベーション実現を目指す(科学者に対するインセンティブ強化)

- 少子高齢化の国内趨勢は顕著。しかしイノベーションなら当面、優秀な一人っ子世代を使って推進できる
- 「人民に優しい」技術開発に熱意。知財権の条件化や「安全」技術開発など、発展途上国のニーズに応える
- 2020年のトランプ米大統領による中国ハイテク攻撃は、習近平にとってはまさに国の「生命線」を狙われたのに等しい  
→「2035年遠景目標」で反発、持久戦体制の構築に着手



# 機能する中国のシステム

「権威主義国にイノベーションは無理」か？

キーワードは  
「フュージョン」  
すべては  
政権の意思の下で

- 2015年以降、習近平は自分の指導力を強化して国内改革を推進
- 党内各「小組」の組長を習近平自身が担い、各省書記の責任制を強調し地方も一律統治、関係各分野に「協調」迫り幹部の目標達成を多指標で厳しくチェック、脅迫手段多用
- 党内ルールの透明化・厳格化、腐敗一掃、監視システム整備（「北斗」、アプリ「学習強国」）
- 学「習」運動、メディア統制、ネット統制、思想統制（知識人は特に）
- 市場への統制も強化（民営企業にも党組織）、しかしイノベーション推進策は積極的に
- 軍民融合、経済と安全保障の結合、「多規合一」「陸海統籌」で共産党の指導力強化
- 陸&海&空の「中国の全空間」を完全統治するためのデジタルインフラ整備
- 科学者の世界に実力主義を導入してイノベーション推進、重点分野に分厚く資金配分

→中国共産党はコロナ対策で自信を深める（コロナ戦“疫”で習近平の個人独裁が確立）

# 2035年遠景目標

- 2021年3月 全人代は「第14次五カ年計画と2035年遠景目標の要綱」を採択

イノベーション駆動型発展の堅持を掲げる(製造強国)

- 最後の第19編、「長期計画を強化して実施を保障せよ」が最重要(党の集中統一領導)
- うち第64章:「国家長期計画体系の構築と健全化を加速」

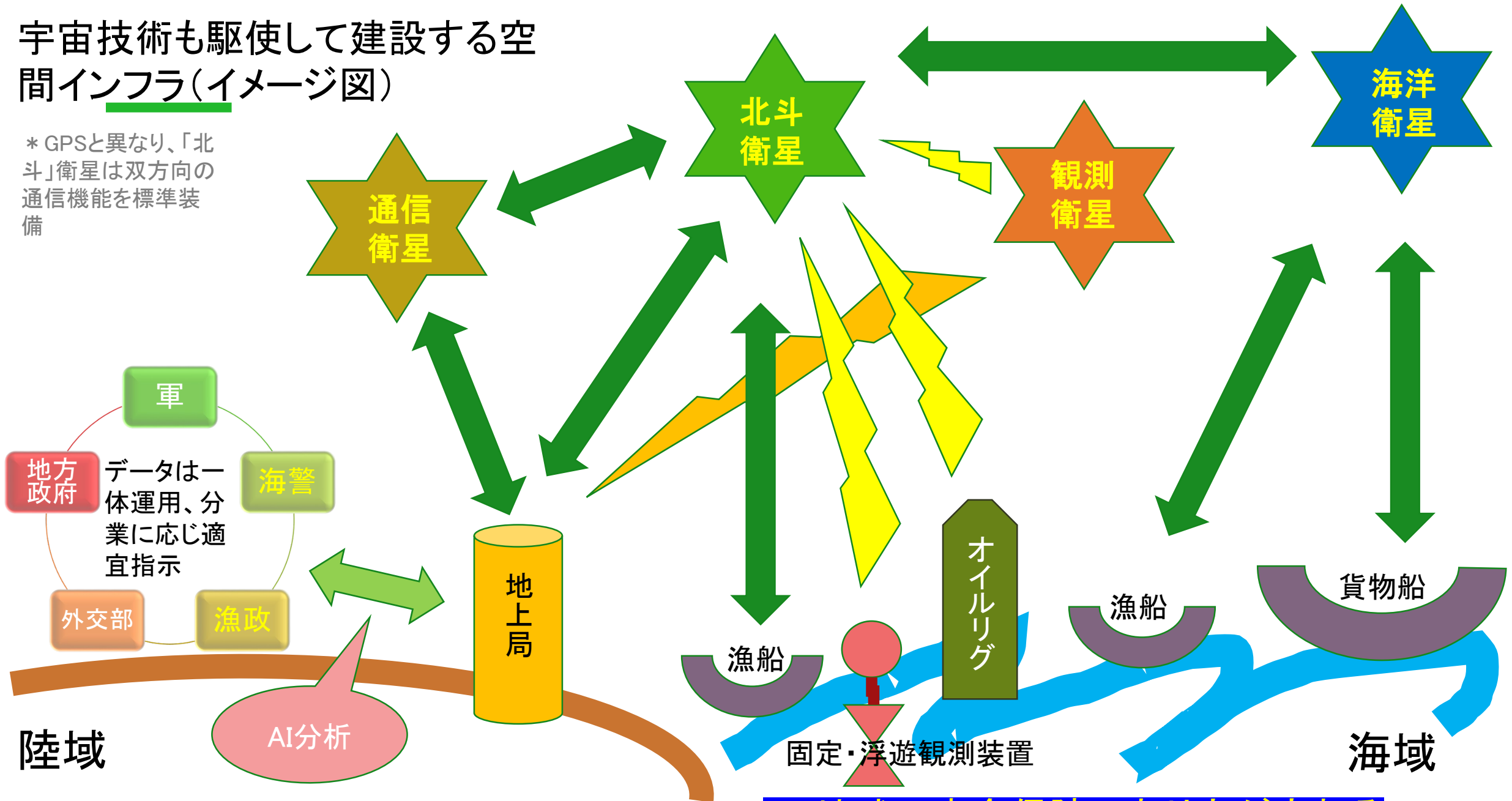
= 国家開発長期計画が主導し、空間長期計画を基礎とし、特別長期計画と地域計画を支柱とし、国、省、市・県レベルの長期計画と共同策定され、正確な位置づけ、明確な境界、相互補完的な機能、統一的な連携を持つもの(赤字部分、国家級はマル秘?)

→イノベーション+空間開拓(国土空間長期計画)の組み合わせ、幹部責任制、達成の時間制限

- 中国は技術開発だけでなく、地球の運行システム全体の掌握を狙う(宇宙、極地、深海、高地)  
中国の能力に関する総合的な解析が急務
- 習近平は2035年までは実権を握るつもりだろう(その後も引退は難しい)

# 宇宙技術も駆使して建設する空間インフラ(イメージ図)

\* GPSと異なり、「北斗」衛星は双方向の通信機能を標準装備



\* 報告者作成

→ 地球の安全保障のあり方が変わる